

司式:大隈 道雄
奏楽:橋本恵美子

前奏:「世の罪を取り除く主よ」(F. ケーブラン)

招詞:眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讃美歌:4「世にあるかぎりの」

交読詩編 126

- 01【都に上る歌。】主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて/わたしたちは夢を見て
いる人ようになった。
02 そのときには、わたしたちの口に笑いが/舌に喜びの歌が満ちるであろう。そのときには、
国々も言うであろう/「主はこの人々に、大きな業を成し遂げられた」と。
03 主よ、わたしたちのために/大きな業を成し遂げてください。わたしたちは喜び祝うでし
ょう。
04 主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように/わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください。
05 涙と共に種を蒔く人は/喜びの歌と共に刈り入れる。
06 種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は/束ねた穂を背負い/喜びの歌をうたいなが
ら帰ってくる。

朗読聖書①イザヤ書 42. 18-25

◆捕囚の解放

- 18 耳の聞こえない人よ、聞け。目の見えない人よ、よく見よ。
19 わたしの僕ほど目の見えない者があろうか。わたしが遣わす者ほど/耳の聞こえない者が
あろうか。わたしが信任を与えた者ほど/目の見えない者/主の僕ほど目の見えない者があ
ろうか。
20 多くのことが目に映っても何も見えず/耳が開いているのに、何も聞こえない。
21 主は御自分の正しさゆえに/教を偉大なものとし、輝かすことを喜ばれる。
22 この民は略奪され、奪われ/皆、穴の中に捕らえられ、牢につながれている。略奪に遭っ
ても、助け出す者はなく/奪われても、返せと言う者はない。
23 あなたたちの中にこれを聞き取る者があるか。後の日のために注意して聞く者があるか。
24 奪う者にヤコブを渡し/略奪する者にイスラエルを渡したのは誰か。それは主ではないか
/この方にわたしたちも罪を犯した。彼らは主の道に歩もうとせず/その教えに聞き従おう
としなかった。
25 主は燃える怒りを注ぎ出し/激しい戦いを挑まれた。その炎に囲まれても、悟る者はなく
/火が自分に燃え移っても、気づく者はなかった。

朗読聖書②マタイによる福音書 9. 27-38

◆二人の盲人をいやす

- 27 イエスがそこからお出かけになると、二人の盲人が叫んで、「ダビデの子よ、わたしたち
を憐れんでください」と言いながらついて来た。
28 イエスが家に入ると、盲人たちがそばに寄って来たので、「わたしにできると信じるのか」
と言われた。二人は、「はい、主よ」と言った。
29 そこで、イエスが二人の目に触り、「あなたがたの信じているとおりになるように」と言
われると、
30 二人は目が見えるようになった。イエスは、「このことは、だれにも知らせはけない」
と彼らに厳しくお命じになった。
31 しかし、二人は外へ出ると、その地方一帯にイエスのことを言い広めた。
◆口の利けない人をいやす
32 二人が出て行くと、悪霊に取りつかれて口の利けない人が、イエスのところに連れられ
て来た。
33 悪霊が追い出されると、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆し、「こん

なことは、今までイスラエルで起こったためしがない」と言った。

34 しかし、ファリサイ派の人々は、「あの男は悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言
った。

◆群衆に同情する

- 35 イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる
病氣や患いをいやされた。
36 また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く
憐れまれた。
37 そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。
38 だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい。」

祈祷

天にいらっしゃいます父なる神さま、復活節第3主日、あなたの復活を
喜び、共に歩むその道を感謝して、ここに集っております。またオンライ
ンでこの礼拝に与っております。どうか私たちを祝し、お恵みを賜ります
ように。

本日は清々しい気候のいい日ですが、教会は20年経った建物の
痛みがあり、私たちは不便を強いられております。どうか100年経ったこ
の地で私たちが、これからも、あなたに恵まれて、力強くこの地であなた
の福音と伝道の業に励むことができますように。何より私たちの信仰が鍛
えられ強められ喜びを持って礼拝に参与することができますようにお導き
ください。

老いのため、病のため、怪我のため、色々な事情で夫々の生活の場から
ここに集うことが困難な者を多く覚えますけれども、夫々の場にあつて、
ご家族、ご親戚、ご友人、多くの方々と共に、あなたによって照らされた
光の道を歩むことが赦されますように。私たちの愛する家族、繋がる者た
ちにも、どうかあなたの福音が届きますように。

これから御言葉を語り継いでくださる御牧師をどうぞ強めてください。
聞く私たちが心を澄まされ、耳を研ぎ澄まし、あなたの御言葉、あなたの
救いの業を夫々に与ることができますように。

このお祈りを主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げ致します。
アーメン。

讃美歌:433「あるがままわれを」

説教 「メシアの憐れみ」

佃 雅之

主イエス・キリストは、見えない人の目を開かれ、口の聞けなかった人
が語ることができるようにされました。どちらも夫々に深い意味を持つ癒
しの出来事です。けれども、今朝は主の興された奇蹟そのものよりも、そ
れを経験した人、また目撃した人々の反応に目を向けたいと思います。癒
された人たちはどのように応答したのか、それを見た人たちはどのように
受け止めたのか、そこに私たちへの大切なメッセージがあります。

“人を癒す”という主の御業がはっきりと現れた時、その受け止め方は
同じではありませんでした。或る人は喜び、キリストのことを言い広めま
しました。また或る人はキリストを疑い否定したのです。この違いはどこ
から来るのでしょうか? 聖書に記された出来事は時代を超えて今を生きる
私たちにも問いかけています。

聖書には「目の見えない人」が度々登場します。当時のパレスチナでは強い

日差しや砂埃り、また衛生状態の悪さのために視力を失う人が少なくありませんでした。「目が見えない」ということは生活の全てに不自由を抱えることを意味しました。社会の中でも孤立しやすく生きる希望を失ってしまうような状況に置かれることが多かったのです。彼らはイエスさまに向かって「**ダビデの子よ**」と叫び助けを求めました。旧約聖書には、「**やがて来られる救い主メシアがダビデの子孫から生まれる**」という約束が繰り返し語られています。神の国を語り、多くの人を癒し、奇蹟の御業を行われるイエスさまと出会った時、彼らの心には「**この方こそ約束のメシアではないか**」という思いが湧き上がったのでしょう。

主イエスが彼らに問いかけられます。「**わたしにそれができると信じるのか。**」ここでキリストが求めておられるのは、奇蹟への期待ではなく「**わたしを信頼し、わたしに心を開く**」ことです。二人は「はい、主よ」と応えました。この短い言葉の中に、私たちが招かれている信仰の姿が示されています。信仰とは主からの問いかけに対して、「はい」と応えることです。私たちは信仰と聞くと特別な学びや深い経験の積み重ねが必要なのではないかと考えてしまいます。けれども信仰とは私たちの力を示すものではなく主の問いかけに対して、「はい、主よ」と応えていく歩みです。もし信仰が人間の力や心の強さによって成り立つものだとしたら、その歩みは不安定で不確かなものになってしまいます。信仰とは私たちが既に主の憐みの下に置かれていることに気づくことです。だからこそキリストは、「**あなた方の信じている通りになるように**」と言われました。この言葉は、「**あなた方がわたしの言葉を信じて受け止めるのなら、わたしの御業に与ることになる**」という意味です。キリストは私たちの小さな「はい」を受け取ってくださいます。そして主は癒された二人に対して、「**このことは誰にも知らせてはいけない**」と命じられました。「なぜでしょう?」

当時の人々が期待していたのは、力によって救いをもたらす強い救い主の姿でした。しかし本当のメシアは人々の期待とは全く異なる形で現れます。キリストは私たちの病も、罪も、悩みも、苦しみも、その全てを身に引き受けて十字架に架かれます。力によってではなく愛によって、支配することによってではなくご自身を与えることによって、人を救いへと導かれる方こそ聖書が証している本当のメシア「**ダビデの子**」の姿です。

続けてキリストは「**悪霊に取りつかれた人**」から悪霊を追い出されます。しかしここで起こったことには特別な意味がありました。この人は「**口の利けない人**」であったからです。当時ユダヤでは悪霊を追い出す時には、まずその「**悪霊の名前を言わせる**」というのが一般的でした。「**お前の名は何か**」と問い、その名を明らかにした上で、「**出て行け**」と命じるのです。そのために「**口の聞けない人から悪霊を追い出すことは不可能だ**」と考えられていました。もしそれができるとすれば「**ただ一人、メシアだけである**」と教えられていたようです。だからこそ、「**群衆は驚嘆し、『こんなことは、今までイスラエルで起こったためしがない』と言った**」のです。キリストと出会った人々は、いよいよ「**この方こそメシアではないか**」と考え始めています。

しかし一方で「**ファリサイ派の人々は、『あの男は悪霊の頭の力で悪霊を追い出している』と言いました。』**」同じ御業に触れながら人々の応答は大きく分れました。

この二つの癒しの物語を続けて読むと一つのことに気づかされます。盲人の目は開かれました。一方でファリサイ派の人々はイエスを見ていながら目を閉ざしたのです。見えなかった人が見えるようになり、見えているはずの人が見えなくなっていく、そこに神の国の深い意味が表されています。

しかしファリサイ派の人々の反応と私たちは無関係と言えるのでしょうか？ 私たちもまた時に主に背中を向けたり、疑いを抱いたり、「**神がおられないのではないか**」というような生き方をしてしまうことがあるのではないのでしょうか。祈りながらも、「**なぜ何もしてくださらないのか**」と心の中で呟いたことはなかったでしょうか？

今日読まれたイザヤ書でも、主の僕であるイスラエルが、耳の聞こえない者、目の見えない者として厳しく裁かれています。本来イスラエルは神の言葉を聞き、神の御業を見てその恵みを世界に伝えるために選ばれた民でした。けれども多くの御業を見ても悟らず、御言葉を聞いても理解せず、神の御心に従って歩むことができていませんでした。イスラエルは霊的に鈍くなり、心の目も耳も閉ざされた状態に陥っていたのです。そして 24 節が極めて重要な御言葉です。「**奪う者にヤコブを渡し/略奪する者にイスラエルを渡したのは誰か。それは主ではないか。**」イスラエルの民が他国の支配を受け、大切なものを奪われ、苦しむことになったのは一体誰のせいなのか。「**この苦難の原因は、神が私たちの嘆きを聞いてくださらず、苦しみを顧みてくださらないからだ**」という言い方です。

しかし預言者は気づくのです。「**この方にわたしたちも罪を犯した。**」実は見ようとしていなかったのは神ではなく私たち、聞こうとしなかったのも神ではなく私たち。それでもなお神は、ご自分が僕として選ばれたイスラエルの民をお見捨てにはなれませんでした。イザヤはイスラエルの霊的な鈍さを厳しく示した直後に、43 章であの有名な慰めの言葉を告げます。「**恐れるな、わたしはあなたを贖った。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。**」神は審きと同時に、変わることをない憐みを注いでくださるお方であります。

この神の憐みと同じ憐みをキリストも示されました。キリストは目の見えるようになった二人に、「**このことは、だれにも知らせてはいけない**」と言われました。「**しかし、この二人は外へ出ると、その地方一体にイエスのことを言い広めた**」と書かれています。一方で当時の信仰の指導者たちは、悪霊を追い出されたキリストのことを「**あの男は悪霊の頭だ**」と言ったのです。

キリストからご覧になれば、どちらも正しく神の御心を理解しているとは言えません。しかし問題は、他人の愚かさをどう受け止めるのかということです。学校でも、職場でも、家庭でも、教会でも、人の愚かさを見つけたり、指摘することは簡単です。けれども、「**あの人は愚かだ**」と言ったところで、何が変わるでしょう。そこから信仰の実が結ばれるのでしょうか。

キリストは人の愚かさを見下すことなく、その愚かさにこそ愛を注がれました。人々の愚かさによって自分が踏みにじられることさえ、お赦しになりました。聖書は私たちに問いかけています。人の愚かさを嘆くだけで終わるのか。それともその愚かさの中にある人々に神の言葉を届ける者として立つのか。

キリストはどうされたかが 35 節以下に書かれています。主は人々に拒まれ、敵意に囲まれても、その歩みを止めることはありませんでした。キリストはいつものように、町や村を残らず回って御言葉を語り、御業を行い続けられたのです。主はどのような時も変わることなく、人々のただ中へ入って行かれました。なぜキリストは御言葉に従わない者がいても、「**悪霊の頭**」と言われても、変わることなく伝道を続けられたのでしょうか。聖書はキリストのその目には私たちが「**飼主のいない羊のように**」見えたからだと伝えています。聖書が私たちを「**羊**」に譬えるのは、羊の姿が人間の弱さをよく表しているからです。羊は導く者がいなければすぐに迷い、危険に曝され、

食べ物を見つけることもできません。守り、導き、養ってくれる羊飼いがいてこそ、生きていけるのです。だからこそ、羊にとって最も大切なのは羊飼いの存在です。

私たちは自分の不確かさや理不尽で不条理な世の中に揺さぶられ、翻弄されながら歩んでいます。そのような私たちをご覧になり、主は「深く憐れ」んでくださいます。「憐れむ」という言葉の元になっているギリシャ語には「内臓(スラグクノσπλάγχθυον)」という意味があります。相手の苦しみを遠くから眺めるのではなく、まるで自分のことのように感じてしまう、相手の痛みに触れて自分の内臓が痛むほどに心が動かされる、自分の方が苦しくなってしまうほどに相手の苦しみを負ってしまう、それが、聖書が語る「憐れみ」という言葉の意味です。

私たちが与えられた命を生き抜くために本当に必要なのは、表面的な理解や形だけの助けではありません。この主の憐れみこそが私たちを支える力となるのです。そして憐れみの主は、今日の箇所終わりで弟子たちに語られました。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

この言葉は日々主に倣い、伝道に励む教会に与えられた約束の言葉です。“神の国の福音を述べ伝える”ということは決して容易ではありません。今日の箇所に示されていたように、受け入れられないことも、誤解されることも、時には敵意を向けられることさえあります。しかし主は、「収穫は多い」と言われます。人の目には困難や限界しか見えないような場所にも、主はすでに刈り入れるべき実りを備えておられます。だから主は「働き手を送ってくださるように願いなさい」と言われるのです。

主は私たちに“あなたが働きなさい”とは言われていません。私たちには何の力もないことを主はご存知です。人の心を変え、救いへと導く力は私たちの中にはなく、神から与えられるものだからです。だからこそ主は「願いなさい」と言われています。

神が働かれるところに救いが起こります。神が起こされる働き手によってこそ福音は確かに伝えられていきます。必要な時に必要な所へ主は必ず働き手を送ってくださいます。求められていることは、私たちが“主の言葉に信頼して祈る”ことです。“心から願い求める”ことです。自分の計画や力に頼るのではなく、“主よ、あなたがなさってください”と祈るのです。そして祈る中で、もし主が私の名を呼ばれるなら、その時には喜んで応え、恵みに与る者として、働き手として用いていただくのです。

急ぐことはありません。焦ることもありません。主の御業は私たちの都合によって進むのではなく、神が備えておられる最も相応しい時に進められていくからです。焦りから出る働きはやがて疲れを生みます。しかし祈りから始まる働きは神の力によって支えられるのです。自分の力ではなく神の働きに信頼すること。それこそが教会に託されている勤めです。

しかし神の御業が進められていく時、全てが順調に整え、誰もが喜び合うとは限りません。むしろ誤解や反発、時には対立や痛みを伴うことさえあります。それでも私たちは、困難の中にあっても、主に従い、主の御業に使え続けるのです。

聖書を読み進めると教会が為すべきことが全て示されています。教会の働きとは独自の何かを始めることではありません。主イエスが始められた御業に参与し、その働きをこの時代、この場所で受け継いでいくことです。

その先にこそ神が備えてくださる勝利があります。お祈りを致します。

聖なる神、あなたが主イエス・キリストにおいて、日々私たちを深く憐れんでくださる恵みを覚えて感謝致します。どうぞ主よ、あなたの憐れみによって、私たちにあなたの御言葉を聞く耳と、あなたの御業を見る目をお与えください。そしてあなたの問いかけに、“はい、主よ！”と応える信仰を与えてください。またあなたの憐れみを受けた者として、あなたが私たちを用いようとされるなら、どうぞ思いのままに用いてください。全てをあなたにお任せします。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌・443「冠も天の座も」

献金・感謝(増田多可子)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

天の父なる神さま、敬愛する兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦され、心から感謝致します。説教通し、豊かに御言葉を与えて頂きました。感謝いたします。本日は『メシアの憐れみ』の御言葉を通し、神の御業に、主の問いかけに、“はい、主よ！”と応じる信仰の姿を教えて頂きました。また神の働きに主の言葉に信頼して願い求めることを導いて頂きました。私たちがこの一週間を夫々の歩みの中で、この今日頂いた御言葉を心の糧として歩むことができますように。

私たちは必要な物を与えられております。そして主の僕として生きることが赦されています。今夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴として御前お献げ致しました。どうぞ祝して教会のご用のために用いてください。

主が教えてくださった主の祈りを共に祈り、新しいこの一週間を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌・88「心に愛を」

派遣：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告：(1)長老会：教会堂正面玄関入口部分天井から落下物が発生したことの報告・注意事項・当面の措置など。(2)北支区婦人部：2026年度アジア学院学生のためのホームステプログラム実施についての報告とお願い。(3)100周年記念事業委員会：新版「信濃町教会と私」取扱案内。

後奏：「そして地には平和を」(F.クーブラン)